

馬込め便り

日本聖公会東京教区 大森聖アグネス教会



252号

2025年10月26日発行

編集・印刷:

馬込便り編集グループ

日本聖公会 東京教区 大森聖アグネス教会

管理牧師 司祭 シモン・ペテロ 上田憲明

〒143-0025 東京都大田区南馬込 1-58-8

Tel&Fax (03) 3771-3459

Eメール: agnes.tko@nssk.orgホームページ: www.nssk.org/tokyo/church/oomori/

巻頭言

《自分の寿命はいつも今日》

管理牧師

司祭 シモン・ペテロ 上田 憲明

人がいつ死ぬかというのは、正確に計算し得るのだろうか。お医者さんに、後一ヶ月の余命と言われた人が、そのXデーが近づくにつれて、誰も助けてあげられないほどのスピリチュアル・ペインの中で苦しみながら、亡くなられたりするのを見ると、たとえ予想が当たっていたとしても、そういう具体的な月日を余命として告げる必要があったのだろうかと思う。その一方で、病状の経過の重大さを教えてもらわず、誰が見ても、後、何ヶ月も生きられないだろうと思う人が、何年も先まで生きることが前提に話しておられた、というような話を聞くと、非常なさびしさを感じる。

元気な時は自分が死ぬのは、いつかという遠いかなたの時だと、ぼんやりと思っていたにすぎない。それもまた幻で、現実

には、生きている者は必ずある日に死んでしまう。それは思っている通り、遠い先かもしれないし、明日かもしれないのである。病気になると、特に重い病気になる、余命という話が出てくる。余命というのはいったい何であろうか？

「余命は後、〇カ月と言われたので、もうそろそろ寿命なんです。」とさびしそうに、あるいは怒りながら話されるような方と会う度に、「それはあくまで予想、予測、または統計上の話であって、寿命ではない。」と思ってしまう。もしも今か今かと死ねる時を楽しみにしている人があるなら、ひよっとしたら、それは寿命と言えるのかもしれない。でも、そもそも寿命というのはカウントダウンするものではなく、カウント・アップしていくものであるのではないかと、とも思う。

生まれてから今まで、ずっと私たちは一日、一日を昨日から今日へと数えてきている。昨日がなければ、今日はなく、今日がなければ、明日はない。理論

上は、ともかくとして、現実の世界では、個人の寿命は今日があってはじめて存在するのである。私にとって、寿命という考え方は今日という一日がどんなに大切な一日であるかということとを告げてくれる考え方だと思う。過去は過ぎ去ってしまった、もう変えられない。明日は予想もしなかったことが起こるかもしれない。自分に与えられているのは、いつも今日という日だけ。毎日、今日という日が寿命として与えられているのではないだろうか。今日一日も命を寿(ことほ)ぐような日でありますように。



写真提供: M.K.